

五千人を養った奇跡の意味を理解するために、わたしたちは先週から、4週間にわたって、ヨハネによる福音書とそれに関連した聖書の箇所を読んでいます。

先週は、パンを食べて満腹した人々が、イエス様を王様にしようと押しかけてきたのに対して、「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」と言われたことについて考えました。

わたしたちが、自分の目に見えるものだけに振り回されてしまっていることを反省させること。パンという「しるし」によって、神様がわたしたちのことを配慮してくださっていることに気づきなさい。そんなテーマが、パンの出来事の第1の意味だろうと思います。

それでは、第2週、第3週は何を学ぶのか、ということですが、わたしは、これを「みことば」と「聖餐」という風に理解してはどうか、と思っています。聖餐式では、前半が、「旧約、詩編、使徒書、福音書」という風に聖書のみことばを味わい、それについて説教を聴く、ということになります。そして後半は、パンとぶどう酒の形をした聖餐であるキリストの肉と血によって、わたしたちが養われるわけです。そして、今日は、前半のみことばについて考える、ということになります。

わたしたちは、ヨハネによる福音書の最初に、「はじめに言があった」という表現が出てくるのを知っています。そしてそれは毎年クリスマスに読まれるのですが、簡単に言うと、イエス様こそが、神様から遣わされた、天から降って来た言だということです。

このイエス様を表す「言」のことを、今日の聖書の箇所では御自身が「パン」と言い換えておられます。

『わたしは命のパンである。 6:49 あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。 6:50 しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。 6:51 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。』と言われるのです。

ただし、このパンを、単なる空腹を満たすものと考えてはいけません。そこに示された「しるし」の意味を考えなさい、というのが、先週学んだことでした。命のパンであるイエス様は、元々は、ヨハネによる福音書1章では、「はじめに言があった」と言われるとおり、言葉なんですね。

今日の旧約でも、荒れ野で与えられたパンであるマナの意味が語られているので、それを読んでみましょう。申命記8章2節から読んでみます。

『8:2 あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。 8:3 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだ

けで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。』

この最後の所に、私たちになじみ深い言葉が出てきました。

『人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。』という言葉ですね。

先週はちょうど、人々の不平に対して、モーセが神様に祈ったら、神様がマナを降らせて下さったことが旧約に出てきました。このマナの出来事に限らず、イスラエルの民がエジプトを出てから、荒れ野で四十年苦しみを受けたのは、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」と結論づけているのです。

そして、この言葉は、イエス様ご自身が、荒れ野で悪魔の誘惑を受け、「空腹なら、目の前にある石をパンに変えて食べたらどうだ。」と挑戦された時に、それを退けた時の言葉です。私たちは、イエス様の言葉のように受け取っていますが、元々は、モーセが人々に語った言葉だったんですね。

今週私たちが学ぶこと。それは、イエス様の口から出る一つ一つの言葉に従って歩むのが、クリスチャンだということです。モーセの指導の下で、荒れ野で四十年訓練されたイスラエルの人々のように、わたしたちもイエス様の言葉に従って歩む時、たとえこの世での限りある命が終わっても、やがて終わりの日に復活させてくださる、その希望を持って歩みなさい。だから、常に神様が共に居て、イエス様の言葉で養われるのだ、という確信を持ちなさい、と教えておられることを心に留めなさい、というのが、第2週の、パンの出来事から学ぶことだと思います。

それで、今日の結論のような箇所を挙げています。今日の福音書の最初の方です。

『6:38 わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。 6:39 わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。 6:40 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。』

さて、このように、イエス様を信じ、イエス様の口から出る言葉によって生かされて、復活の望みを持って生きることが大切なのですが、みなさんはそんな生き方をしている人々を知っていますか。

以前宗像の教会に居た時、訪ねて来られた方に私がずっと読んで気に入った本についての話をしました。そして、それを後日届けたのですが、その人は、それを読んで、よっぽど感動したのでしょうか。その後また訪ねて来られて「この本を、親しい人に是非読んでもらおうと思っている。」と言うのです。どうも読んでもらいたい人というのは、家族の中で不幸が続いて落ち込んでいる人らしいのです。

私が紹介した本というのは、ユダヤ教の聖職者であるラビ、ハロルド・サムエル・クシュナーという人が書いた「なぜ私だけが苦しむのか」という本で、「現代のヨブ記」という副題がついています。

この人のことは、もう皆さんには何度も紹介しました。彼の息子アーロンは、プロゲリア（早老症）と言って、体の成長が止まるのですが、顔つきなどはどんどん老けてしまって、老人のような風貌になります。そして10代で亡くなってしまふ、本人も家族もとても悲しい、つらい病気です。

元々の英語のタイトルは、「When bad things happen to good people」日本語に訳すと「良い人々に悪いことが起った時」ということになります。

そんな人に対して、私たちはどんな慰めの言葉をかけられるでしょうか。著者であるクシュナーさんは、自分自身が傷ついた者のひとりとして、思ったこと、感じたことなどを、いろんな例を挙げて話を進めます。その中には、もちろん副題になっている、旧約聖書のヨブ記も上がってきます。

今回改めて読み直すと、心に残ったのは、彼の本が話題になって、第二版のための前書きに書かれている文章です。

『悲しみにくれている人々への援助について講演をするとき、私は次のようなことを人びとに話しています。「ものごとには時というものがあって、手のほどこしようのない状況が確かにあるのです。あなたがどれほど努力してみても修正したり解決できないことがあるのです。それでも、そんな時にも出来ることがあるのです。悲しみに打ちひしがれている人のそばに、ただただ黙っていてあげ、その人が泣いていれば泣く手助けをしてあげるのです。そうすれば、その人が置き去りにされ一人ぼっちで淋しく泣くということはなくなるのです。」

私が、この文章を読んだ時、思い出したのは、ヨハネによる福音書11章に出てくる、ラザロの死を嘆いているベタニアのマルタとマリアの姉妹が泣いている姿です。35節の「イエスは涙を流された。」という表現が出てきます。このあと奇跡が起こったりするのですが、それはイエス様の復活を予測させるようなものであって、事実ラザロが生き返ったかどうかは、問題のある個所です。ただ、この箇所の前33節34節にも、こんなことが書かれています。『イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来てご覧ください」と言った。」そしてそれに続いて「イエスは涙を流された。」となるのです。

イエス様の言葉ではありませんが、パウロがローマの信徒への手紙12章15節で「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」と勧めています。おそらく、イエス様の行動が、そのような生き方へと弟子たちを導き、十字架に架けられて死ぬ時まで、会ったこともないパウロにも影響を与えたのだらうと思います。それくらい、悲しみの中にある人に寄り添うのがイエス様の生きざまだったのでしょう。

今日は、パンの出来事の意味を理解するために、生きた言葉としてのイエス様の生き方に注目したいと思って、ユダヤ教のラビの本などを引用しながら、考えてみました。